
水色の花 2

西川裕美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水色の花 2

【コード】

N0929BA

【作者名】

西川裕美

【あらすじ】

恋人と食事に来たあたしはふと将来に対する漠然とした不安なかられる。そしてそこで考えたこと。兄の描いた絵。

水色の花の続きです。

ふとした不安

デート帰りに訪れたカツ井家はちょうど夕食どきということもあつてかかなり込み合っていた。待ち合い席で二十分くらい待たされた後ようやく席に案内された。あたしたと佑二は奥のテーブル席に向かい合わせに腰をおろすと、注文を取りに来た店員に同じカツ井のセットを注文した。

「いつも思うことだけど、一年が経つので早いよな。歳を取るごとにどんどん早くなつていく気がする」

店員が厨房に戻って行くと、向かい側の席に腰掛けた佑二がナプキンで手を拭いながら言った。

「どうしたの急に？」

佑二の科白があまりにも唐突だったのとその改まったような口調が可笑しかったのでからかうようにあたしは訊ねた。すると、佑二は苦笑して、いやべつにと答えた。

「ただもう今年も終わっちゃうんだなあと思つてさ」

「それもそうね」

今日は十二月二十九日で、昨日から会社はお正月休みに入っていた。佑二とは社内でも知り合つて付き合つようになった。

「あともうすぐで俺も三十歳か」

佑二はため息をつくように言った。佑二は今年二十九歳で、来年三十歳の誕生日を迎える。

「もう完全におじさんね」

あたしはからかった。

「恵美子だって俺とひとつしか歳が違わないんだから、同じような

もんだろ」

あたしの軽口に佑二は可笑しがっている口調で言った。

「まあね」

あたしは微笑笑して認めた。あたしも先月の誕生日で二十八歳になった。自分が二十八歳になることなんて永遠にないと思っていたのだけれど、でも実際にはあっさりと二十八歳になってしまった。あまりにもあっけなく。そしてこれからも確実に少しずつ年老いて行くのだろう。そう思うと、怖いし、少し焦る。

「恵美子は正月はどうするの？家族と過ごすの？」

あたしが考え事をしてしていると、佑二が口を開いて言った。あたしはテールの上に落としていた視線を佑二の顔に戻した。

「妹さん、東京から戻って来てるんだろ？久しぶりに家族でどこかにいったりするの？」

「今のところそういう予定はないのかな」

あたしの妹は大学で東京にいったあとそのまま東京で暮らしている。就職はせず、アルバイトで生活しているみたいだ。二十三歳で若いからまだフリーターで良いのかななんて思ったりもするけれど、やはり将来のことを考えたら就職しておいた方が無難だろうと思う。そう思っただけでも電話で話したときには言っているのだけれど、彼女はあまりちゃんとあたしの話に耳を傾けていない。

妹はつい昨日正月が近いということもあって地元に戻省してきていた。帰りたくて帰って来たというよりは母親に言われて仕方なく帰って来たようだ。妹が今帰って来ていることはさっき車のなかで佑二には話してあった。

「あれ？せっかく家族みんなで過ごせるって言うのにそういう予定とか特にないんだ」

佑二はあたしの返答が意外だったのか少し驚いたようにあたしの

顔を見た。

「うちの妹ってマイペースだし、あんまり団体行動とか好きなタイプじゃないから。でも、どこかご飯食べに行ったりはすると思うけど」

あたしは取り繕うように言った。

あたしの科白に納得したのか、してないのか佑二はふうんと頷くと、

「俺んちなんて親戚が多いから毎年正月の元旦の日はじいちゃん家で飲むことになってるけどな」

と、佑二はうんざりしているようなそれでいて楽しがっているような表情で言った。

「そっか」

わたしはどう感想を述べたら良いのかわからなかったのだからただ相槌を打った。

「料理まだかなあ」

注文してからまだ十分も経っていないというのに佑二は焦れっただけそう厨房の方を振り向いて言った。

「お店混んでるし、多分もうちょっとかかるよ」

あたしは佑二の顔を見ると、宥めるように言った。佑二は頼杖をつくと、いまひとつ納得しかねるといった様子で頷いた。そしてしばらくのあいだそのままでいたけれど、ふと思いついたようにあたしの顔を見ると、

「わりい。ちょっとしよんべん」と言って席を立つと、お手洗いがああるお店の奥の方へと歩いて行った。あたしは去って行く佑二の背中をなんとなくぼんやりと見送った。そして改めて佑二のいなくなった空間に視線を彷徨させた。

佑二がいなくなってしまうたことで、あたし座っている位置から

は窓の外の世界を望むことができた。もうすっかり日は暮れている。窓の外には田舎の、濃度の高い闇が広がり、そのなかにあたしの顔が淡く浮かびあがって見えた。闇のなかに浮かぶあたしの顔はひどく心細そうな表情を浮かべていた。何かに怯えているような。どうしてそんなふうに見えるのだろうかと考えてみたけれど、よくわからなかった。

あたしは頼杖を付くと、暗い絵を眺めた。黒く塗りつぶされた絵を見ていると、さつきまでしていた佑二との会話が脳裏のなかに蘇って来た。歳を重ねるにつれてそのスピードが早くなっていったような感覚。二十八歳という自分の年齢。二十八歳といえばまだまだ若いといえると思うのだけれど、それでも自分が歳を取ってしまったなという感覚は拭いきれない。

中学生や、高校生の頃、あたしのなかで二十代後半や、まして三十代なんてずっとまだまださきのことだと思っていた。それが実際のことになってしまふなんて。不思議な感じがするというよりはいまひとつ実感がなかった。

佑二とは付き合い始めてから三年になる。そろそろ結婚しようかという話も出ている。あたしは佑二と結婚するのだろうか？そして子供ができて色んな日々の雑事に追われて気がつけば今よりももっと歳を取ったたとえば四十歳とか五十歳になっているのだろうか。そんな日々は果たして幸せと呼べるのだろうか？それがあたしが人生に対してほんとうに求めていたものなのだろうか？

世の中にはあたしなんかよりももっと遙かに恵まれない境遇にいるひともいるのだからこんなことを思ってしまったてはいけないのだからうけれど、それでもなんなく物足りない感覚がある。どんどん先細りになってその未来の先端がやわらかく底のみえない暗闇のなか

に沈み込んで行くような気がする。あたしにはもつと輝く未来が、華やかな、喜びに満ちた日々があったはずなんじゃないのか、そういった本来の未来を、あたしは知らないあいだに失ってしまったような気がする。あたしは軽く顔を伏せると、掌を広げてみて見た。その掌のなかについての間にかすり減って小さくなってしまった希望の欠片を見たように感じた。

兄のじい

「どうしたの？」

頭上から声が降ってきた。顔をあげると、いつの間に戻って来たのか、佑二が立っていた。

「べつになんでもない」

あたしは無理に口角をあげて首を振った。

佑二はあたしの素振りを特に気にした様子もなく、あたしの向かい側の席に再び腰掛けた。それからあたしたちはたわいもない話をして時間を過ごした。会社の同僚のだれそれがどこで何をしたというような話。そのうちに注文した料理は運ばれて来た。

運ばれて来た料理は待たされただけあってかなり美味しかった。このカツ丼は美味しく、地元ではかなり有名だ。

「そつえば今度、そろそろお前ん家のところに挨拶にいかないかな」

佑二はカツ丼を箸で口のなかにかき込むのを止めると、あたしの顔を見て思い出したように言った。

「まだいいんじゃない？」

あたしは苦笑めいた微笑を浮かべて言った。佑二としては結婚を前提に付き合っていることをそろそろあたしの両親に伝えておこうと思ってくれているのだろう。もちろんそんな佑二の気持ちは嬉しかったけれど、でも、一方ですごく怖かった。あたしの家に挨拶に行くことによって、あたしの家族の内情が佑二に露見してしまうことが。もしほんとうのことを告げたら、佑二との結婚がなくなってしまうんじゃないかとあたしは心配していた。

あたしはまだ佑二には告げていなかった。あたしにはひこもりの兄がいることを。そういえばあたしの兄と佑二は同じ年なんだと今更のように気がついた。

あたしの兄は五年くらい前からずっと部屋にひきこもっている。大学を出たあと普通に就職して働いていたのだけれど、会社が合わなかったのか、すぐに辞めて実家に帰って来た。そしてプロの画家になりたいと言い出した。それで父親と喧嘩になった。父親はプロの画家になつてなれるわけがないだろと兄を罵った。その頃から兄は次第に様子がおかしくなっていた。今はほとんど自分の部屋から外に出ず、部屋でネットをしているか、たまに気が向けば絵を描いているみたいだ。そんな兄を思うと不憫になる。兄はもともと内向的な性格で外に出て働くのには向いていなかった。傷つきやすい性格だった。そんな兄に対して父親はあんなふうに言うべきではなかったのだ。兄の希望を聞き入れて応援してあげるべきだったのだ。

確かにプロの画家になるのはかなり難しいし、兄の将来を思えばこそあんなふうに厳しい口調で言ったのだろうけれど、そのことがかえって兄を取り返しのつかないくらい深く追いつめてしまった。

記憶のなかでいつも兄は絵を描いている。記憶のなかで、あたしは兄の側に近くづく。そして兄の描いている絵を覗き込む。兄が描いている絵は家族の絵だ。記念撮影みたいな形で家族みんなが集まって、全員が正面を向いて笑っている。もちろん、そのなかにはあたしもいる。絵のなかのあたしは嬉しそうで楽しそうでこれからの未来に何の疑問も不安も感じていないように見える。その絵はほんとうにいつかどこかで兄が描いた絵なのか、それともあたしが作り出した空想の記憶なのか判別がつかない。

「どうかした？」

ぼんやりとしていたせいだろうか？ 佑二が怪訝そうな表情であたしの顔を見た。あたしは少し強張った微笑を浮かべてなんでもないと答えた。そして思った。兄のことを告げたら、佑二はなんて思うのだろう、と。なんて感じるのだろう、と。

佑二はどちらかというところと保守的な考え方をするとあるから、あるいはもしかしたら、兄に対して否定的に感情を抱いてしまうかもしれないと予想した。三十歳になろうという男が社会に出ずに、何を甘えたことを言っているんだと不快感を抱くかもしれないと思った。

確かに一般的な考えからすれば佑二が兄に対してそんな感想を抱いたとしても仕方がないのかもしれない。文句を言える筋合いではないのかもしれないのかもしれない。でも、と、あたしは思う。兄だって好きでひきこもっているわけではないのだ。自分のなかに自分ではどうすることもできない弱さがあってひきこらざるを得ないからそうしているだけなのだ。みんなが同じような強さや能力を持っているわけではない。

でも、そう言っても父親と同様佑二は納得しないんじゃないかと感じた。自分が当然のようにできているのだから、他人も当然できるはずだと考えるんじゃないかとあたしは思った。

兄のこと 2

「ねえ、あのさ・・・」

あたし佑二の顔を見ると、口を開いた。そしてあたしにはひきもりの兄がいることを伝えようとした。兄がひきこもりになってしまった経緯について。

でも、上手く言葉が出てこなかった。何をどう伝えたら良いのかわからなかった。

「どうしたんだよ。そんな怖い顔してさ」

あたしが適当な言葉を思いつけないでいると、佑二はからかうような口調で言った。

「あのさ、佑二はひきこりのひととかってどう思う？」

あたしは訊ねた。ひきこもりという単語を口にするとき、かなり勇気がいった。

「ひきこもり？なんで？」

あたしが口にした話題があまりにも脈略がなかったせいだろう、佑二は怪訝そうな顔つきであたしの顔を見つめた。気のせいか、ひきこもりという言葉を目にしたとき、佑二の顔つきが一瞬鋭くなったような気がした。

「・・・べつになんできてこともないけど・・・昨日テレビでそういうひとの特集やってたからさ・・・なんとなく」

あたしは苦笑して自分が口にしようとしていた言葉を飲み込んだ。

やっぱり言えなかった。もしほんとうのことを告げて、佑二があ

たしとの結婚を躊躇うようなことがあったらどうしようと恐れてしまふ情けない自分がいた。怖かった。佑二を失ってしまいそうで。

「ひきこもりねえ」

佑二はあたしの不安をよそに、面白がっているような微笑を浮かべた。そして頬杖をつくと少しのあいだ考えていたけれど、

「まあ、ひきこもりのひともそうなるには色々事情があるんだろうとは思うけど・・・」

「思うけど？」

「でも、結局は甘えてるだけなんじゃないかなあって思う。こういう考え方って冷たいのかもしれないけど、でも、そんなふうにしてたってどうしようもないじゃん。みんな同じだよ。生きるっていうことは大変なことだし、みんな辛いこととか、嫌なことを我慢して頑張ってるわけなんだからさ、そのひとだけ特別っていうわけにはいかないと思うよ。ちゃんとしようよって俺は思うね」

「・・・そうだよね」

あたしは佑二の科白に、傷ついた寂しい気持ちで相槌を打った。

「あれ？なんでそんな浮かない顔してるの？」

佑二はあたしのご機嫌を取ろうとするようにどことなく卑屈な笑顔を浮かべて言った。

「何か俺、気に障るようなこと言った？」

「べつに。そんなことないよ」

あたしは自分の感情を隠そうと微笑みただけけれど、それがちゃんと笑みの形になっているか自信が持てなかった。あたしはテーブルの上のお冷やを手にとると、一口飲んだ。そして手にしていたお冷や

のグラスをテーブルの上に戻すと、

「ごめん。あたしもちよっとお手洗い」

と、佑二の顔を見て言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0929ba/>

水色の花 2

2012年1月2日01時48分発行